

榎本 渉 著

僧侶と海商たちの東シナ海

紹介者 高橋 典幸



講談社

2020年10月刊
(講談社選書メチエ
として2010年初刊)

A6判

328ページ

本体 1,180円

目次

- 序章 中世日本と東シナ海
- 第1章 「遣唐使以後」へ
- 第2章 古代から中世へ
- 第3章 大陸へ殺到する僧たち
- 第4章 「遣明使の時代」へ
エピローグ
- 補章 遣明使の後に続いたもの

海 は人々を隔てる障壁である一方、人々を結びつける交流の道でもあった。四周を海に囲まれた日本列島でも、古来、海を通じて多くの人やモノが往来し、日本の社会や文化に大きな影響を与えてきた。ただし、その様態は決して一定不変のものではなかった。本書は9世紀から14世紀に至る東シナ海を舞台とする海域交流の歴史を明らかにしようとするものである。

本書がまず注目するのは、この時代、東シナ海を渡って日本と中国とのあいだを行き来していた数多くの僧侶である。彼らの動きを丹念に追いかけることによって、交流の実態にせまろうとするのである。その結果、浮かび上がってきたのが、海上貿易に従事していた商人、海商たちである。9世紀初めに海商が東シナ海に登場し活動するようになると、それまでは遣唐使船など国家権力に頼るしかなかった僧侶たちは、海商の船を利用することによって随時、日中間を往来することができるようになったのである。さらに12世紀後半に日本の側で貿易や出入国の国家管理がなされなくなると、僧侶たちは国家による保護(規制)を離れて、より自由に東シナ海を往来するようになったのである。しかし、このような状況も14世紀後半に終止符を打たれる。元末内乱を経て成立した明は国家間の交通しか認めず、海商の活動を抑圧した。その結果、僧侶の自由な往来も途絶する。9世紀以来状況を呈した東シナ海は、ここに大きな曲がり角を迎えることになる。以上、3つの画期を軸に描き出される東シナ海の歴史は実に明快である。

本書が僧侶と海商に視点をすえた点もたいへん興味深い。たとえば、12世紀以後、中国(南宋や元)に渡った僧侶たちは国家の保護を離れた結果、一修行僧という立場で中国寺院に入り研鑽を積むようになった。その結果、彼らは経典や仏像だけではなく、生活様式も含めて中国の寺院社会そのものを日本に持ち帰ろうとしたという。鎌倉仏教や鎌倉文化の特質も、こうした視点からとらえると、より理解しやすくなるように思われる。

また海商たちのゆくえも気になるところである。彼らのそれまでの活動を考えれば、明の抑圧によってそのまま消滅したとは考えにくい。視野を15世紀以降に広げれば、いわゆる後期倭寇の出現・活動を考える手がかりがこのあたりにありそうである。このように、海域交流にとどまらず、日本の社会や文化、さらには中世後期へと論点が広がっていく点にも本書の魅力があるといえよう。

(たかはし・のりゆき／東京大学大学院人文社会系研究科教授)

吉田 伸之・森下 徹 編

読む解く学ぶ 日本近世史 全体史へ〈山口啓二の仕事〉

紹介者 牧原 成征



山川出版社

2020年5月

A5判

196ページ

本体2,000円

目次

- 序章 全体史へ——山口啓二の仕事
- I部 山口啓二を読む
- 1章 近世初期秋田藩における鉱山町——院内銀山を中心に
- 2章 秋田藩成立期の藩財政
- II部 史料を読み解く
- 解説1 梅津政景日記について
- 解説2 院内銀山について
- 史料研究ノート1 院内銀山町の商いと町定
- 史料研究ノート2 「領内の上方」と年貢米処理
- III部 山口啓二に学ぶ
- 1章 院内銀山の都市社会史研究に学ぶ
- 2章 藩政史研究の原点
- あとがき

学習指導要領改訂で新しく始まる「日本史探究」では、古代から中世へ、中世から近世へとといった時代の転換とその歴史的環境を理解することが重視され、各時代の冒頭では、「時代を通観する問い」を立てたり、仮説を表現したりすることが求められている。もちろん資料・史料を活用することも求められている。

こうした課題の前に立たされている読者に、本書は1つの導きの糸になりうる書物である。戦後歴史学の揺籃・発展期に、新しい問題意識に立って『梅津政景日記』という良質の史料を深く読み解くことで、まさに「近世への転換とその歴史的環境」を明らかにしようとした歴史家として山口啓二がいた。本書は彼の仕事を、現在の読者にもわかりやすく解説しようとした入門書である。

山口は、網野善彦や永原慶二なども深い親交をもち、荒野泰典・高埜利彦・吉田伸之・塚田孝ら多くの近世史研究者を育てた。いずれも対外関係、宗教・朝廷研究、都市史・身分制など、今日の日本近世史の基本的な枠組みを形づくってきた研究者たちである。

山口は1950～60年代に、東京大学史料編纂所において『梅津政景日記』の刊行を担当した。梅津政景は、秋田藩佐竹家の重臣で、江戸時代の初めに出羽院内銀山の山奉行などをつとめたため、その日記は、江戸時代初めの銀山や銀山町の人々の姿を、いきいきととらえており、山口はそれを幕藩制社会成立史のなかにもごとに位置づけた。

本書には、そのエッセンスが凝縮された山口の2本の論文を採録し、編者2人が解説を加えている。山口が使った歴史用語・史料用語にも注記・説明が加えられ、引用史料にも読み下しと現代語訳が添えられている(I部)。それだけではなく、II・III部では編者2人が、山口の仕事をつまえながら政景日記を読み解き、新たな論点の提示を試みている。本書を読みながら、近世社会とそれに関する重要史料について、基礎的・導入的な知識・理解・方法が修得できるように工夫されている。

さて、このような内容をもつ本書が「全体史へ」と題されていることが重要である。そこには、山口の営みから、「歴史の事象を、表層ではなく深部から、権力や著名人の視座からではなくふつうの人びとの眼から、部分や断片ではなくつねに全体との関わりの中かで」考えようとする姿勢を学べる(学びとって欲しい)という編者のメッセージが込められている。

(まきはら・しげゆき／東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

藤田 覚 著

日本史リブレット 48 近世の三大改革

紹介者 太田尾 智之



山川出版社

2002年3月刊

A5変型判

112ページ

本体800円

目次

はじめに

- ① 善政悪政交替史観と三大改革
- ② 享保の改革
- ③ 寛政の改革
- ④ 天保の改革
- ⑤ 悪政の政治構造

おわりに

江戸時代のいわゆる「三大改革」といえば、8代将軍吉宗による享保の改革、老中松平定信による寛政の改革、老中水野忠邦による天保の改革の3つをさすことが一般的であろう。高校生に日本史を教えてきた個人的な経験でも、中学校でそのように教わってきたという生徒たちは多い。実際に中学校や高校で用いられる歴史教科書を開いてみれば、それらは18世紀以降の政治や社会の動揺に対応する改革として叙述されている。しかし、それぞれの時期における改革が具体的に何を課題としたのか、それぞれの改革の類似点や相違点は何かといった点は、必ずしも明確になっていないのではなかろうか。

本書のタイトルは『近世の三大改革』となっているが、著者は江戸時代後期の政治史を三大改革論ではなく二大改革論で理解したほうがよいとする。すなわち、18世紀後半の宝暦・天明期こそ幕藩制国家と社会の解体が始まる起点であり、それ以前の享保の改革を幕藩体制の危機への政治的対応と位置づけることは不適切で、寛政および天保の改革を重視すべきであるという。その論拠については、ぜひ本書をお読みいただきたい。

また、それぞれの改革の前後に悪政がおこなわれたという「通俗的、俗説的な理解」に警鐘を鳴らしていることも本書の重要なポイントである。著者のいう「通俗的、俗説的な理解」を具体的にいえば、元禄時代の悪政による財政悪化が享保の改革をもたらし、賄賂や汚職で腐敗した田沼政治が寛政の改革を必要とし、その後は11代将軍家齊の大御所時代に悪政が展開したことで天保の改革が始まったとするものである。著者の言葉を借りれば、「悪政とは改革担当者により下された評価にすぎない」とすらいえるのであり、「前の政治と改革の政治はまったく断絶したものと理解すべきではない」のだ。

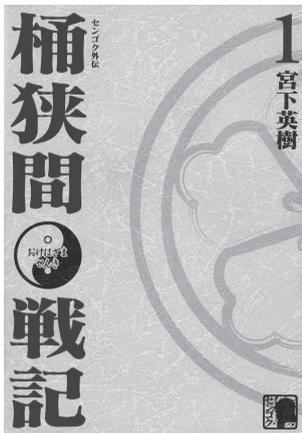
本書の「おわりに」では、ペリー来航以降の幕府政治についても展望されており、江戸時代後期の政治史を授業で扱うときにたいへん参考になる書籍である。とくに新課程における「日本史探究」の授業を構想するうえで、いわゆる「三大改革」相互の類似点や相違点を生徒に考察させたり、そもそも改革政治が当時の民衆にとって「善政」であったのかを考えさせたりすることも、本書を導きの糸にして実践することが可能ではないかと思われる。

(おたお・ともゆき／東京都立国立高等学校教諭)

宮下 英樹 著

センゴク外伝 桶狭間戦記 (全5巻)

紹介者 中家 健



講談社

2008年3月～
2010年12月刊

B6判

232～248ページ

本体各695円

目次

〔第1巻〕

プロローグ

第1話 方菊丸

第2話 梅岳承芳

第3話 今川五郎義元

第4話 織田弾正忠信秀

第5話 松平次郎三郎広忠

第6話 太原崇孚雪斎

(第2巻以降略)

〔巻末解説〕

第1巻 『桶狭間戦記』の社会について

第2巻 『桶狭間戦記』の金融について

第3巻 『桶狭間戦記』の下剋上について

第4巻 『桶狭間戦記』の合戦・乱取りについて

第5巻 『桶狭間戦記』の「自らの力量を以て」について

日本史を担当される教員には歴史専攻出身でない先生も少なくないと思う。そういう方にとり、コンテンツベースではなく、コンピテンシーを重視する日本史探究にあたり、この漫画作品を紹介したい。

『センゴク』は、美濃の土豪から秀吉の寄騎となった仙石秀久を追った作品だが、東大の本郷和人氏らの協力で最新成果を織り込んだ意欲作だった。ここで取り上げる『センゴク外伝 桶狭間戦記』は秀久登場以前、桶狭間の戦いに至るまでの戦国期に、気候変動と飢饉、支配と自治、都市と商圏、米と銭の関係など、社会・経済史の観点から迫っている。織田弾正忠家が、尾張半国守護代の家臣にもかかわらず、信秀が三河まで侵略する力をもちえたのはなぜなのか、異端児信長を輩出したのか。すべては信貞・信秀・信長の3代が、全国に末社をもつ津島神社の所在地で、木曾川と伊勢湾の結節点に位置する宗教都市・商都である津島湊を掌握したことにある。弾正忠家の合戦の成否が商圏の拡大・縮小に直結するがゆえ、津島衆は資金・物資面だけでなく、常備の馬廻衆への参加など全面的に協力する。この馬廻衆の創設は、平安以来、有力農民の自衛のための武装という武士(農兵)のあり方に大きな変革をもたらす。信長はやがて給人、すなわち初歩的な兵農分離による專業武士を主力とすることで、農繁期の出陣や長期戦を可能とした。

一方、太原崇孚雪斎を師にもつ今川義元は、父氏親のつくった『今川仮名目録』を用い、自治が認められてきた村々の紛争を解決していたが、義元自身がまとめた『今川仮名目録追加』で村々の自力救済を否定し、戦国大名による支配を確立している。また、駿河の繁栄をめざし流入した民を、飢饉で荒廃した土地に差配して生産増をはかっている。こうして介入し、差配することが、兵の大量動員につながり、それを機能的に動かすために寄親・寄子を導入する。やがて、尾張の穀倉獲得のため義元は進発する。弾正忠家が伊勢湾商圏をもつてのびたなら、商圏の奪取でたたくると。かつて語られた鉄漿大名^{おぼくろ}でも、天下取りの行軍でもなく、分国法を完成させる器量と武威を誇る海道一の弓取りとして。

桶狭間の戦いに至る背景を、時に模式図を用いて説明し、史料には現代訳をつけて展開しており、新学習指導要領が求めるアプローチといえる。戦国の世をイメージするのに適した作品であり、本書をきっかけにより深く学び、授業に活かそうと思っていたら幸いである。

(なかいえ・たけし／東京都立小石川中等教育学校教諭)